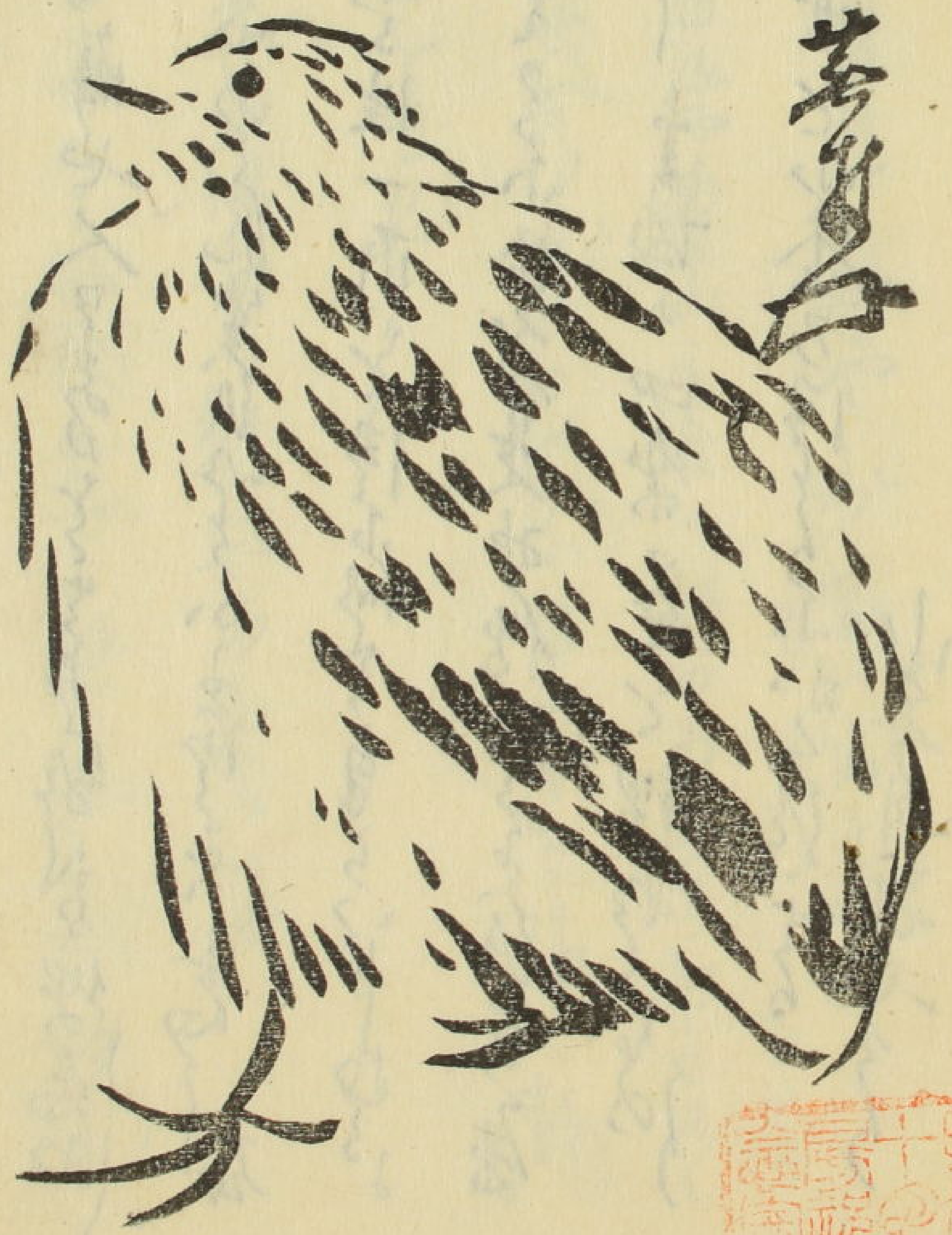
卯辰山集

加賀 麦水撰

へ 5
1921

翁

鷹の目も
いまや暮ぬと
啼うつら



題言

具眼の人乃眼ハ紙窓ふてひ載くる坂郷の友吉も
撰みける白河李子(?)呈して韻(?)きると云ふ清くよとまる
句帖やまた韓也人のまへまとさよ鄙(?)の家他の底ある
人まちむかしあら風雅ハもふまに須(?)らる(?)意ハ太
意心乃まのそ性一所を待(?)ハ似ら自ら(?)帰し也る
ありの風光の乃ふ啓(?)見是非僧(?)あまさ紙窓屋
某乃とし金襟の四楽菴を甥(?)あをとなり
議りまの世をと少参乃清(?)ふかくし給ふさる

水声月朝也なり

入夢路(?)恋や秋(?)家路河(?)との山
見水土ま圃(?)猿やあらん見え一様のあふ山きさと及
かく年の菴をむき呉(?)わ河ふ市第(?)を徳(?)く静よ
世かね道をとりね

水声と倚(?)松の結(?)やあふれ隠

二言ある節の妻りさそや枝(?)笠ふ思ひあまさて絶り
みあふよこ初(?)ろ呉(?)郷の妻のえ去てりし金

花の妻まさくりぬすの國(?)聴(?)し

こなしハ湖東西京よ移りむ又ある明の若し

程経ぬ年のつもる人ハあまりに花にうき隠し
生涯を暁露にさまよハんと思ふ志を目出度乃
雅友につかぬる志ゟ

標庵　麦水　識

芳遊のそのかみ経めくりての
まゆかあしくもいふ春の別をは

送別歌僊

金澤犀川連中

見送りは吹かゝる良き鶴哉　秋坡

盃哉飄箪結先キの草鞋　麦水

手拭の目にとりてまきかへらず　白華

桜にはふる人の命も人々の有　東鳥

猫の子にあてがふ昨日乃鰯かな　鮎釣

遠き帆の雲まひつゞく　禹谷

あさふ露ゆふけふ粧ふ井　二喬

傍若を踏れし冬やそゝり也　和菊

若咲あ懈しかるゝ酔ふ来き　丁固

夏の夕ある枝ゟ提灯　胡山

適ふ社神楽そきへ郭公　暫夢

墓ゟ干菓子も添ふ事幸崎　壷劢

孝行さつと嘆き筆に取付し　布邑

月ハさせる楷の始ほり　麦布

猟人の振返ふかたや杉縁や　壷後

送る草の何と四りやる　五芝

水上豊なや緑のかこり也　一岐

蕨を採て案内者ゟ成　規工

鞍置て笠に頬白の啼てそれ　鉄司

社領に付て多く涼茂　胡石

鉢の木乃末て一盃於雨ら涼　談子

火燵を母へ明けれ於抜　貝茨

珍らしき日の暮てあり川むかい　五柱

めしいあふりは酒ゝ水まぜ紅　尺歩

米乃手箱さ色ハきりしれ　卯泗

榾降しきて蘭ゝ一筆さし　葭由

拾料しき燈の月かり悪しなれ、　鄙子

近江宮乃佐渡秋初汐　農布

雪芝居の窓て指へ雪の粉　雲士

あさ涼く松葉戻る火泊　百虎

口上を聞見の窓へ旅立ち　右江

薬山ひくき幟一日　呂尺

初生ハゑまゐのふ來てひゝく　草紫

師もきかしの長なり也　瓜歩

三疊乃坊ハ花ニ手遊ひニも　李晩

蚊やつる釣乃雛鶴　執筆 馬匹

歌僊　小松連中

秋も尻のつきまゝ安芸も舘立　羅嵐

立籠て佛く行も紙月　野冬

糸ふ往ても聲ハ中絶如錦小く　麦水

羽織をちる秋の八指をと　松井

烟ハ奥乃秋古小家てつれ　舎来

松を明ふ臼乃むらさき　巻仙

今小まく祖父ハかく見祖父ス居る　岩夕

細工ても見て宗も一新　露江

唯ぬ小依乃菊も履し　工見

袂の舞の人く出ゆかれ　野卜

暁の襟りも雅なし詠ゝ有　和全
喰ふと思へは菓子盆の減　里夕
逢坂もうつ見ゆる望湖楼　康上
物ほしかゝる参り形く袖　里東
おちかゝる名香につけし繊月　冬
寿永と蝶の夢ハいつ形を　嵐
打へうけ富貨延めうち縮メ　井

六伸子家ゝを龍舞ゝ回ふ　水
二御通りの若ハ志からく かんこ鳥　仙
まいおろしのけふる深級　朱
珠数持て伽藍の繪図もて取廻し　江
是まてとも分あり出る　夕
まことの紙いつもの浴をなす者也　ト
さらしん口の枯桜にある月　兄

松とし侭ふ月押つけたる棕的鞄　夕
かくても柘榴の袖もしみ哉　全
物まて縫針ちよ吃きる　吏
一ト階乃居白眼かゑみて通り　上
仮擔よ店くて傘を揚て行　嵐
春盤の角に風呂舗を出さる　冬
伊ウ勢遠ハ手代のすよ班ほせ　夕

針醫て横に来さき近付　井
是ひしかのも屏風へ出る巡ゑ　来
梅の咲て京に献立を認め　仙
はなる称る花ある俤ふゐ　氷
仙家の水の水よ曲ゑ　草

歌僊　金翁亭下ち統　大聖寺連中

幸乃穢れや中の花　麦水

蝿ハありとも秋の中宿　素丈

琵琶弟のゆふへの月に紙蹴て　玉波

何乃藤岸ハ口上小まて　之丸

矢挟間から忘れて猫を投てやる　春卯

簾を見んとへる猿のくさひ迄　洞鬼

風ゥりと岩に何ぞ迷ハ有難ぬ　浮仙

香ぬ返し生まれくる果哉　夫由

枝ぬきちきるゝ覚ふ蛸井　蛙夕

雲隠の戸乃前にさかき唄　其谷

枝も松ふ志めて宝恵様て出る　紫狐

火縄の減り乃更て去月　祖明

折くハ引板に藤延の音かな　由

新みと壘石のきるかな池へ　夕

樫林に各好せまり焚火や　丸

豆腐屋の来て水をはねし紅　波

ちる花も金子積むる砂乃へ　免

芝居の読合畑の寺ぬ　郭

永き日を下駄で二三里暮かな　谷

館奥ハ外に知る紅梅子　仙

千里も屋紙に爪の付きけり　哨

子共の凧の延ひ松に連　栊

一足ハ家縁踏て牡丹　ま

嬰乃茶の湯牡丹に雪　水

琵琶もんて淋ハ水分小せ　久

もちまちのく重き物　出

衣ミ売ハ舟さくや立ゐ　波

見る所へ坐麦の奢る河岸端　丸

金魚鉢自子扇のまく嘯き　郵

石の木もふも故事ハしらぬや　兎

ほうハち障子明けりきたる夜　狐

深の警古を昭戦てもてくる　谷

多井へ這入ぬ人に先て花　仙

鐘一枚ある覚ハ大勢　支

丈夫も花のかる名をちまりて合　水

此藏乃門又雲の門　唱

発句　四季并ニ故人多人を分ル

添州ハ駒の嘶くも秋の経　伊勢　麦林

ほとゝぎす楼の常稼も月の鶯　麦浪

山寒し千年一木も初桜　兎士

朔水乃醒ゝ帰るや杜若　洞翁

日の暮やあまり遠き原の鹿の角　温故

麦林の五柳を手向て

数ほとの旅の筆の余りや柳陰　東武 柳居

続やつりぬる手先涼し　秋瓜

似つさ年の出る自見月し　兼盛　鳥酔

山すそは雉子かし湯　蓬乃たし　涼袋

秋ふもとに鳴渡て桜花　菊岡

平賣ッた渡子か秋の秋風　加賀 北枝

ひとつ葉も流れて柿や川千鳥　希因

あわれなり花の裾千代　三井の鐘　山隣

武士の篭ふ峯の八重桜　龍静

丸合羽白し書く手子多ひ　里朝

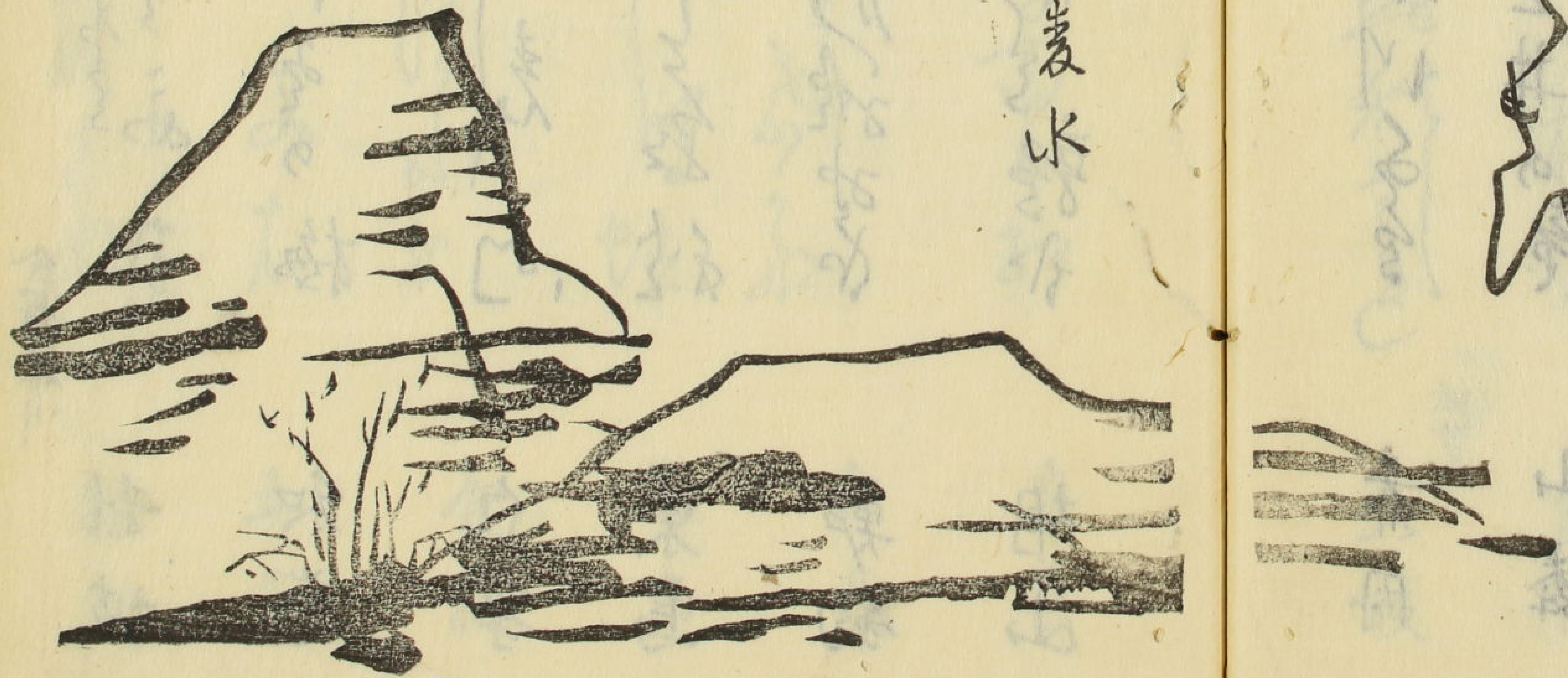
ほととぎす隅田し　山さくら　千代尼

夕立や人のさし引く海の上　珈凉

はゆるし よわらく 蒲団
り逢ふや 花
をちら かしきん

あさへ
子規木芽添の星乃
白ふ光り
麦水

此書ハして出しハ当時の手形なし
名鳥紙の光ヲ述りしを吉内の由ハ
をらくかに自書を彫し侍る九集
白中に多く魂情をさる外例の
一峰のこ龍月氏ハ金城の出判よ
華をえしめ人の句とならく輿羽
中も及ハんと後蛸ヶみるに数画を
のせて後集の序ともなれるを掛
る也



梅かゝ清りきし出し　あまる雨かな　秋坡

中子なりの絵めきまや冬の梅　和菊

菊の日に梅ハ淋しき川　白華

文鎮ふさふ鐘しぐれ軒　東鳥

紅のうきもとゝ露か猿みたれ　鄭鈞

畑も牛に昼出しやる鶯かな　胡山

咲ひるも代々かゝる月の雨哉　布邑

水音舟の出でのぼる霞春の花　壷茄

夕ぐれの梅はまさる蛙　捻布

霞立僧よ来たるさくらも津の水　壷狡

山を見ぬ梅哉かる木の子の花　五笑

旅人のハ一息つきて霞かな　志卜

そり雪をとかさ岩陰りたゝしうき　尼 暫亭

鶯きゝ赤きを梅乃白しも　二喬

すへてぬる囀の名を墨ぬる　餘司

木芽吉かり漏るゝまし蝶の髪　貌工

ちる花の色ハ入まめて燕自　高治

山吹や流ハ音もさむく鐘の聲　貝茨

蝶も吞ミの楼もなし乃也　高匹

人やれ木くゞれ影もる月　諸子

すへし竹ハあさき撫ぬ家ヶ破ること　葫石

はたれ乃名ハ短し春の日　木五

波寄て来る春草枝ことに　五柱

春日野に嬉しき粧しみ若菜摘　紙歩

ひるかほや畔田の端る寺の跡　右松

夕立や都は母代けり残こ　浮雀

人数こそ雪持梅や冬の月　可李

すゝきにも押へる越や橋の反　女 芋紫

ひとつ火ほかし松のかけにも盛　一風

桔梗かいゐ露の色　和し乱継　桂景

桑乃日より旅路や蕎麦の花　雲士

初乃冬雉来るを忘れて都まて　右江

うらみえをおくれ自称や蒜乃日　呂尺

笠かけて連結ぬ影静也　白麦

娘とかけの森も時も冬乃梅　旋由

嵯峨のも古寺似けしぬくへか　卞酒

落鮎も自ら流るゝ也かは川　東布

田も秋の眷中やきや杉木蓼　尺歩

鏡人を見て游ぶや松の雪　風虎

手さき坂も足もと暗し蝉の声　鋪子

乙鳥と門をかゝりそめ女　野都

おしゐの青葉隠や春の水　丁固

鏑つまを年迎へけらし梅の花　一雙

淡り子もいまをさかしら巨燵かな　李映

和暖なれ風の日の当ル白かな　松任尼 素園

蕣やあさていふめれあさましき種　松任女 きへ

母人の指もとたる露かな　仝 之甫

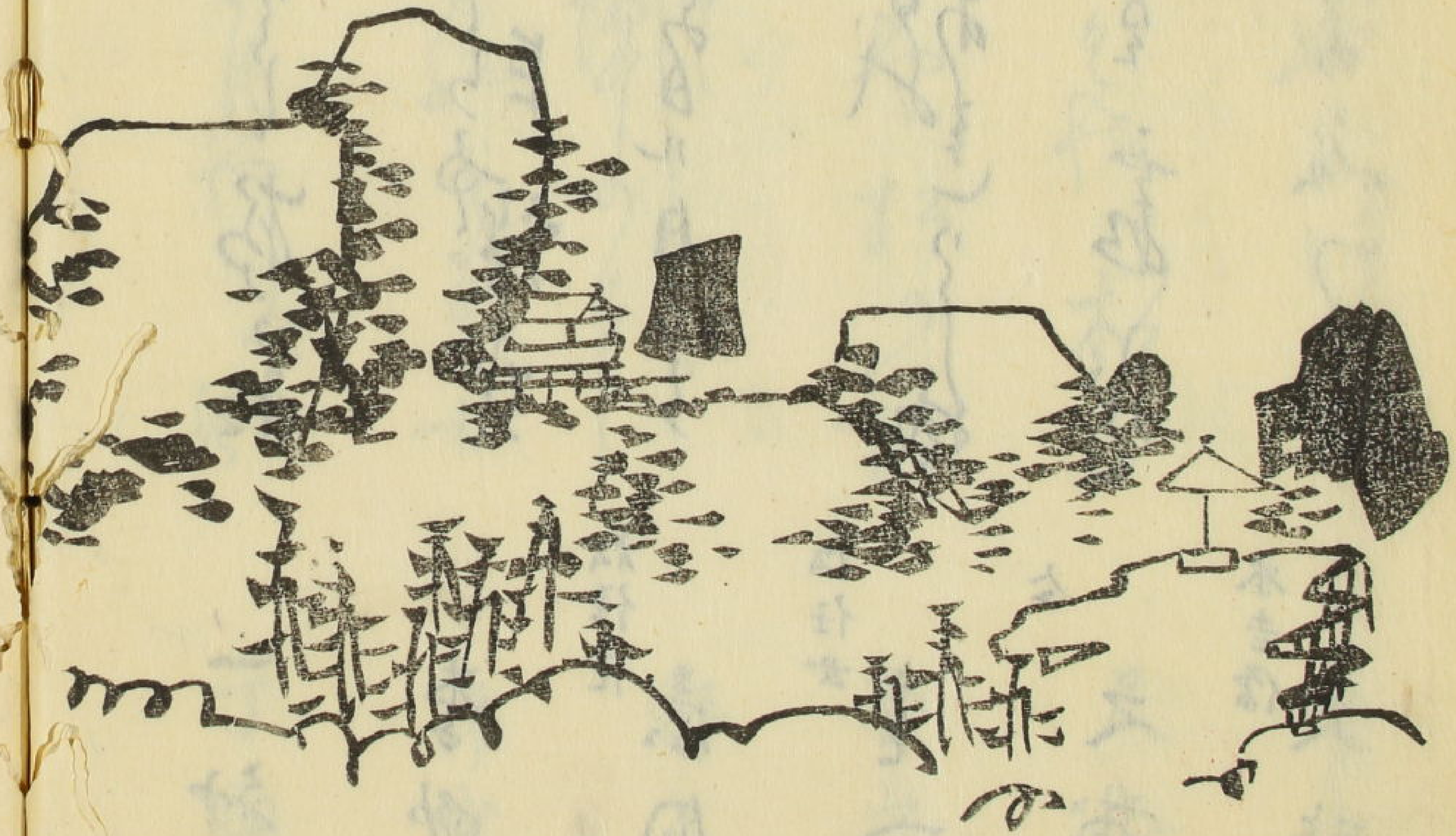
夕白や牛も木幡の夜つゆ　本吉侶 大臨

那谷寺に於りて

咲くらは石ハ石也脚の春　麦水

石こそ龍聞ハ短しかくれ山　松井

初秋や名残ハ峯乃石ふ哉　野丈



初蟬ハ雲かゝ細し高籠　小松　金東

ちり川雲も是晴と雲合セ　花僊

押セハ戸此頃人野山櫻　止意

高乃寺追ふ旅かしむ気　是宙

まり川人の中にも我おひれ水錦哉　甫尹

文月もり見升へみれ冷ハ　卜林

よろひ着た人こそけふの出替り　竹至

おしろ乃椿乃ともあやめ苅　豆箕改　羅嵐

ある人の茶に踏る銘やちとり哉　二瓢

只へ来て雪をつきまさる蕗の花　九説

新樹の香水に影さ黒うな　仟瓜

古山へ我訛見ん富士の月　不二を望山七夕　春水

ゑふの日も芽出しこハく桜哉　野石

ひと窓に身かなりの蛙哉　松井

人跡のせぬ海しぬれいつこ子　工見

月華を枝へはなれ秋のくれ　野卜

鶏乃帰る籬を横に　和全

花咲や一本の松に男女　里夕

早き日を入る家ハ佐保山ふくへの花　里東

以南る梅の花や絵自　知止

杏原た夕日子そ花や蛙乃声　岩夕

ひと見の宿晴るしつゝ咲けり　女　須广

紫陽花や水も未山清と照　女　紡雪

水含子刈もうこ金朝日に　少年　之九

枯しきれ先へ青草を露さ添　市故

苗代や論ぶ見ゑる水加減　兼上

秋乃日のあさのゐく見え折すゑ闇の里秋何と　露江

平の菜子の稲と清の緑禮　八ケ谷　菊上

ましさや縁の人と気合せ　切通　宣中

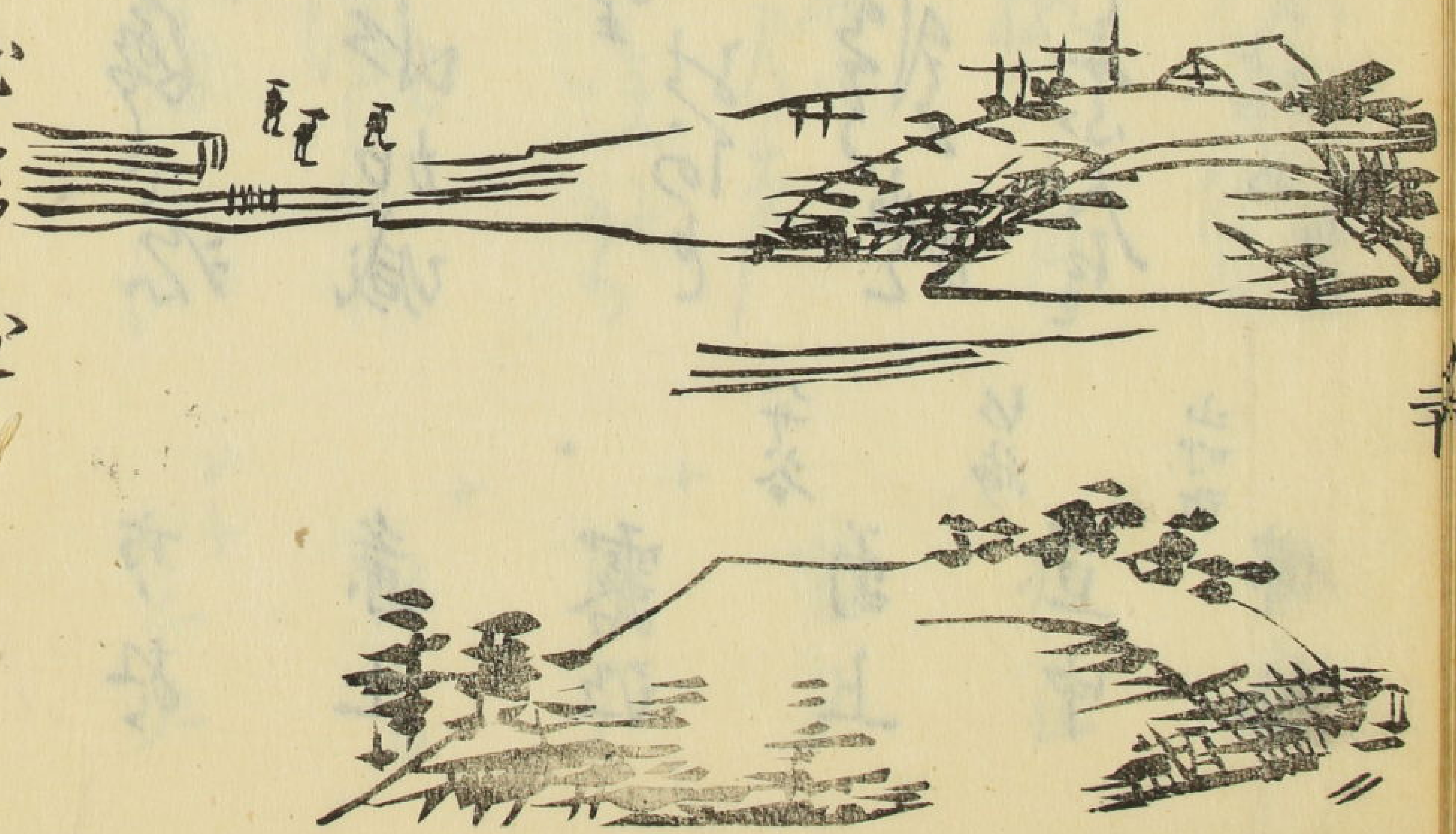
分おも判者もし日水多る判る秋の暑　山町改　佛仙

秋雨の日 大見の浦をとふ

吹落るかまど煙の雨や蓮乃浦　玉波

落て来る水を引や葦の浦　素丈

空ハ唯雲の離乃たち給ふ　麦水



蓮浦雲公画

菜の花や借家の人と親る人と　大聖寺 之丸

栗飯の梦子ハあらる花木槿哉　洞皃

咲り花木の下風ハ傘子ほし　春郊

留る花ハ荻しりまで女郎花　哥床

名題の花や切栗ハ白き哉　丈虫

かすみてハ橋とも虹と見らるる哉　紫柢

むさし野紙十ほめてみたるしくれ哉　素夫

秋くの数乃山名ほしもみや苔すみれ　浮僊

初音りにてやすらぬ事共ほうる　娃夕

鶯の花よりすほるや中乃中　東岩

待やくもりかね立て秋をたのし　巴水

猫子猫乃減る音やうち菜摘　玉波

猫人に道教てうく木槿哉　路長

木枯もとは起のふぬ雨哉かんたか　井谷

水くの瀬く淺く流さるる虹　雨夕

蒼くへ八雨乳の手摘や藤花　之由

雲樋り豆待人をむめ乃気　女 志満

雨をともふ土の心や蝉の声　虎林

夕伸さへ水に楢やかん行　友巴

青柿や見たる尤成る川　秋路

曙か梅見てまさに社ふの花　沙桃

雨に来るも様よる秋の声　素帆

初雪や取立て見る人もあり　仙斗

遠く日に笑ひのむくつ
生海亂抄　里夕

二葉から世に出しけれ水仙花　五衣

梅咲さへ折に来る木の声　五菊

はつ雪や雛に八まとこ云来よ　北路

釣鐘に晴れ雪や清明　山中波久仝　祖唱

初雪や去年の便りを枕がけ　越前鯖谷　歌川

木枯しや菅笠かむりこそ吹つのり　仝兵庫　梨一

旅人の移ゆきも秋のはなさかり　仝鯖江　杉因

見杢しけ邪ふ旦亭也雛子かれ声　湖南八幡　可昌

ちるさ梅如水田清し山の影　寸里

海と梅如青柳や系月　紫芝

秋葉の人（途中の作）新仮し鏡山　竹甫

梅さ木子昔此門や木犀涛　花岸

若鮎や木曾路の水も切飛さ　春友

水たつ足青高し編月　杜効

うき草の旦入そ出鳥地も水　破石

明日晨屋子角さ雛子ちる　春水

若霊の路了安し堂乃梅　多歩

朴かしこ橋に日花や挑白　佃坊

、

片ちに小山自さ人住て二本の松　粟津　文素

菜の花や畑や細路を行き人通り　伏見　鶴英

つまと菜の花待花の初花哉　笛風

見ゆるさへ山あるかゝる秋の空　斗吟

初雪や昼かしかもの松と成　甫水

すゝき揺く様のしるまゝ律しん　松坂　三四坊

、

木からし秋京に頼ぬ秋も思ひ来　洛　餘夢

ひとり画き橋頻に野や引寝晴　啞佛

秋の空続つる山の思ひ哉、　竹芽

風の辛夷ハいつこの梅ぞ　几生

梅乃影ハ去年乃月日をのこしけり　蒹白

踊しく日枝乃猶や大路誰　嘯山

松葉やこゝへ捨る京の水　江都　既白

山吹や母啼の風ハまさに寒し　嵯峨　雅因

来けしめかしぬい
いつらさのよそくのもりゆ
もちさえぬ夜の春ゑ手
かれく宿くしほもくら多會
汲のまくうえるきりのう
も乃そへ明る悟かしをへ
ふりきつ山こゝ、ゆうしけ

こゝは雪しけく水しな
御ことゝんまゝ
まゐらせ候そのほとも
きんすの〆やはよ
と橘やの屋よりて
繁昌まさらく其ゝ

男のまゐらんとて浜くしきのこ
よしあしはせめ迄残ふ候かしく
絳しかせよりはれの雲のあ
郎衣の猿そうは何々たまし
まつ残りしめでたかりきう沼津の
柳さきのかしこまへまいる
めでたく かしく

し川せゝ河風のまにまにつくし
うの出のゝ口うゑとまり河しぬら
かきなかしゆくこゝろのよるへなけ
涼しさもかけていふやと
宮ころ

長 嘉園